

各イベントなどの開催状況については、担当課・主催者などへお問い合わせください。

いずみさの昔と今 第293回

「歴史館に寄贈された資料② ～日常生活を支える民具～」

前回に引き続き、春季企画展「新規収蔵資料展」に関連して、令和元年度に寄贈を受けた資料を紹介いたします。今回は寄贈された資料の中で、家の中で使われた「屏風」と「手あぶり」について紹介します。

「屏風」は折り畳み式の間仕切りで、主として内裏や貴族の邸宅で使用され、衝立（ついたて）と同様に室内に立てて風よけや仕切り、部屋の装飾のほか、人の目を避けるためにも使用されました。その歴史は古く、延長5（927）年成立の「延喜式」には材料・構造・寸法・使用法が詳しく記され、宮廷の年中行事や儀式などでも設営に必要なものとして書上げられており、日常空間だけでなく、特別な空間でも使用されたことが分かります。屏風は縦長の木枠に紙や絹を貼り、偶数枚つなぎ合わせたもので、収納時には折り畳むことができます。また、絵や書画が施された部分を「扇（せん）」と呼び、扇の数によって「二曲」（2枚）、「四曲」（4枚）、「六曲」（6枚）など呼びます。さらに屏風には対になるものも

あり、左右で対になっている場合、向かって右側が「右隻（うせき）」、左側が「左隻（させき）」となります。この右隻と左隻を合わせて一対と呼びます。上述の扇の数え方とあわせて六曲であれば「六曲一対」、二曲であれば「二曲一対」というように呼びます。

冒頭で上げたように、屏風は風や他人の目を避けるための機能的なものでしたが、次第に部屋の装飾といった性質も帯びるようになり、江戸時代には屏風に絵や書を施した豪華なものも作られました。今日でも屏風を目にすることはありますが、そのほとんどが扇に描かれた絵画や書画など、その芸術性が重視されているといえるでしょう。

「手あぶり（手焙とも）」は手などの暖をとるための小さな火鉢のことです。手あぶりは火鉢同様、陶磁器や金属製、木製などがあり、木製のものには炭火があたる内側に真鍮などの金属をはっつけています。その他手あぶりには籐で作られた籠をかぶせたものや、蔓（つる）や紐をつけて持ち歩き出来るようにしたものもあり、火鉢よりも容易に持ち運ぶことができるように工夫されており、漁師が船の上で使用したり、職人が仕事場で用いたりもしたようです。

このように「屏風」や「火鉢」などの民具は、電気のないちよっと昔の人の暮らしを支え続けていました。

「新規収蔵資料展」では、今回紹介した「屏風」や「火鉢」をはじめとした市民のみなさんに寄贈された資料を展示しています。



▶火鉢（当館蔵）

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの ☎469-7140 Fax469-7141
休館日 月曜日、祝日（祝日が月曜日の場合は月曜日と火曜日が休館）
開館時間 午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
入館料 無料

日本遺産・中世日根荘を巡る⑩ ～絵図編（9）「尼津池」～

「日本遺産」に認定された「旅引付と二枚の絵図が伝えるまち—中世日根荘の風景—」のストーリーを構成する泉佐野市の文化財等を紹介いたします。

問合せ先 文化財保護課



◀日根野村絵図に記された「甘漬池」

現在の尼津池



約700年前に日根野村荒野開発絵図に描かれた「甘漬池」は、現在の尼津池（あまづいけ）と考えられています。近世初期に大池と雨山溝が開発されるまでは一番上手にあり、熊取雨山を主要水源とする八重治池などの池群の親池でした。日根野丘陵部に一列一連の形で位置し、八重治池、今は存在しない小池、得成池が続きます。現在も底樋川や中樋川と呼ばれる水路が延び、井川より高い段丘面を灌漑しています。

尼津池という表記になったのは近世以降で、甘「あま」は「あめ」（雨）、雨乞いとの関係があるとの説があります。日根野村絵図では東北部の熊取境の山に描く樹林と大井関大明神の樹林と同じ表現であることから、水源としての意味が込められているという説もあります。

天福2（1234）年の「日根荘諸村在家田畠等注文書（九条家文書）」にもその名前が見られ、日根荘立荘時から存在するため池として、他の池とともに荘園開発の原動力になったと考えられています。

※絵図の写真は、歴史館いずみさの所蔵の複製を使用（原本は宮内庁書陵部所蔵）